

方、スズメガに花粉媒介される種(例、ハシナガヤマサギソウ、ハチジョウツレサギなど)では、3~4 cmの比較的直な距と白っぽい花色を持つものが多い。このように、種内または近縁種間で、“異なる昆虫に適合した生態型”(Ecotype)というものが存在する。この異なる昆虫に適合した生態型の分化が積み重なり、現在目にする多様性を生み出したと考えられる。

この文の最初に述べたずい柱を中心とした形質の解析と送粉昆虫に対する適応をもとに、ツレサギソウ属の進化的系統関係を従来より正確に考察することが可能である。現在の時点ではツレサギソウ属全体を取り扱うのは困難なので、その中の1群のトンボソウ群を取り挙げた。このグループは花序にとま

った蛾の口吻を粘着体の下に誘導し、粘着体を口吻に巻きつける戦略をとっている。トンボソウ群を特徴づける唇弁の基部の側裂片は、この戦略の一端になうものであった。形質の特化の方向性により、ミズチドリはこの群の原始的な種であり、ヒロハノトンボソウなどは特殊化した種であると結論される。ツレサギソウはこのトンボソウ群に近縁で、スズメガに送粉されるように適応進化したため、側裂片が退化するなど、更に特殊化が進んだ種ではないかと私は現在考えている。

ツレサギソウ属の他のグループでも、このように形質の解析と、形質の進化の方向性を組み合わせることにより、種間の系統関係の理解を深めることが出来ると思われる。

[植物ニュース] 133. ハルナユキザサ (ゆり科)

Smilacina japonica A. Gray var. *robusta*
(Makino et Honda) Ohwi

ユキザサの「壮大な変種で、茎は高さ1.5 m、葉の長さは20 cmにもなり、液果も大型である。大きな特徴はその根茎で、太くて節間がつまって数珠状になることである。はじめ群馬県榛名山で発見されたのでこの名がある。その後軽井沢でも採集された。」(日本の野生植物、平凡社による)。このハルナユキザサは軽井沢以外では、山崎惇が野辺山で採集しているが、同じ南牧村の平沢で確認できた(1988, 12, 5)。地上部はすでに枯れていたが、その草丈は1 mを越えていた。壮大な数珠状の根茎は、いくつものに枝分かれしていて、その長さの総計は1 m以上にも及んでいた。(池田登志男)



134. サツキヒナノウスツボ

Scrophularia musashiensis Bonati

上伊那郡の木曾山脈西駒ヶ岳の山麓からこの稀品の産地が報ぜられているが、筆者も1986年7月27日に伊勢滝近くの標高1800 m位の林道沿いの林縁草地で採集した。標本(Na 89719)は信州大学に納めてある。(浅野一男)

135. コマガタケシラベ

Abies veitchii Lindley var. *komagatakensis* Hayashi シラビソ(シラベ)の球果は普通、暗青紫色で、時にオリーブ色をしたアオシラベも普通に混生して見られる。ところが1988年9月9日釜無山麓の海拔凡そ1450 m地点で、苞鱗の極めて大きな、濃橙色をした球果を採集した。そこで林弥栄博士に送ったところ、コマガタケシラベと同定された。

甲斐駒ヶ岳の海拔およそ2400~2450 mで1952年に蟻屋欣二氏と荻住昇氏が発見し、これをもとにして変種として発表されたもののようである。発見場所が長野県側であるかどうかは不明であるが、今回の発見により本県にもたしかに分布していることがわかった。樹上高くに球果が着くのでなかなか発見しにくいのではないと思うが、注意すれば他でも発見されると思う。同定いただいた林博士にお礼申し上げます。(今井建樹)

136. オオイタドリ

Reynoutria sachalinensis Nakai

北アルプスの上高地にも裏日本型分布のオオイタドリが分布する。1988年8月16日、梓川の右岸(明神橋の東北約1.5 km)でケショウヤナギの写真を撮り、一休みして周りの植物を観察中に見つけた。道路沿いの石垣約2.5 mの上ののり面に貧弱な2株(草高約0.7 m)があった。上高地には、まだオオイタドリの記録がない。形状から見て多分のり面へ播種されたものであろう。

近年、長野県下にはこのような例が各地で見つかっている。下伊那郡上村しらび峠、上伊那郡長谷村北沢峠、松本市本郷稲倉峠、東筑摩郡四賀村東北山などである。(横内文人・横内 正)